

秋田県大潟村における学社融合の実践に関する一考察

薄井 伯征
(大潟村干拓博物館)

【要旨】

本稿は、秋田県大潟村において「地域の歴史を後世に伝える」という地域的課題を解決する一手法として、博物館・地域住民・中学校の学社融合による「大潟村歴史すごろく」創作を実践し、その過程及び学習支援者と中学校（生徒・教員）に対するアンケート結果から生涯学習支援上の課題及び学社融合の意義について検討したものである。その結果、①少人数のグループによる授業は、地域住民が中学生に学習支援を行うのに効果的である、②多様な組織の連携による学習支援は、生徒を含め多くの人々に連携の「力」を理解してもらうことができ、互いの信頼関係が構築できる、③学社融合事業の実践は地域住民の主体的活動を促し、地域的課題の解決手法に示唆を与えるものである、と考えられた。

1. はじめに

学社融合は、広義には、社会の中のさまざまな教育・学習活動と学校教育がその一部を共有したり、共有する活動を創り出すことと定義されている¹⁾。多くの博物館では、総合的な学習の時間に対応するため、みかけ上学社融合による教育活動が行われてきた。しかし、学校と博物館との融合部分の活動は学校におけるメリットを強調する傾向にあり、その地域の学校や博物館を支える地域社会の課題解決、及び生涯学習活動の発展や充実につながるケースは少ないように見受けられる。

秋田県大潟村は、八郎潟干拓事業により、かつて日本第2の湖であった八郎潟の湖底に昭和39年に誕生した新しい自治体である²⁾。大潟村は八郎潟干拓事業や村建設・存立の意義と大潟村の歴史を後世に伝えるため、平成12年に大潟村干拓博物館（以下、干拓博物館）を建設した。干拓博物館は開館後、「大潟村 総合的な学習のマニュアル」の配布や博物館のガイドボランティアである大潟村案内ボランティア（以下、案内ボランティア）の養成を行い、ガイド案内・学習支援システムを構築した。これらの取り組みは一定の成果を収めたが、地元の小中学生に対して、村の歴史を伝える行為は一部の授業に限られるなどきわめて限定的であり、博物館の取り組みとしても「八郎潟干拓と大潟村の歴史を後世に伝える」という地域的課題に十分に伝えることができていなかった。また地域住民に対しても、前述した地域的課題を解決するための事業をなかなか展開できずにいた³⁾。すなわち、博物館の使命を十分に果たせていない状況にあった。

そこで干拓博物館では、地域的課題の解決のため、文化庁の支援⁴⁾を得て平成16年度から収蔵資料を用いた教育教材開発事業に着手した⁵⁾。平成18年度からは、「地域の歴史に親しみ、理解し、継承していく」という観点に立ち、博物館の収蔵資料を用いて、あえて地域の多くの方々を巻き込み、子供たちでも楽しめる教材開発を行った。この開発は博物館、中学校、地域住民の3者が連携・協力して実施する学社融合事業として実施された。具体的に開

発された教材は、平成 18 年度は「大潟村歴史かるた」⁶⁾、平成 19 年度は「大潟村歴史すごろく」であり、完成後に村内全世帯に配布された。

これら一連の取り組みは、博物館・中学校・地域住民が共通の目標を「大潟村の歴史を後世に伝えるための教材の開発」として設定し、開発のための具体的活動を創出し、活動の成果を直接地域住民に還元したものである。様々な立場の方々が関わり進めたこの事業は、地域社会にとって、地域の歴史の理解や継承に対して地域全体の関心を高める一つの方法と考えられる。また、事業展開を振り返り生じた課題を把握することは、博物館が地域の歴史や多様な文化資源の魅力を地域住民とともに創出し、そして地域住民の様々な活動を支援していく上で不可欠なことである。

本稿では、平成 19 年度に実施された学社融合による「大潟村歴史すごろく」の創作の実践をふりかえるとともに、中学校および学習支援を行った方々へのアンケート調査結果から、生涯学習支援上の課題及び学社融合の意義について検討する。

2. 「大潟村歴史すごろく」の特徴とその制作過程

(1) 「大潟村歴史すごろく」の仕様

すごろくは、紙面にスタートからゴールまでいくつかのマス目があり、サイコロを振って出た目の数だけマス目の上でコマを進め、早くゴールした人が勝つゲームである。一部のマス目には「一回休み」「2 つ進む」等のルールが設けられており、コマがそのマス目で止まった場合は、マス目のルールに従わなければならない。すごろくはこのようにきわめてシンプルなルールをもち、子どもから大人まで世代を超えて楽しめるものである。今回創作した「大潟村歴史すごろく（以下、歴史すごろく）」の仕様として、紙面は B2 版の大きさに裏表両面を使うものとし、マス目に干拓博物館収蔵資料の写真を用い、その写真の簡単な説明とともに、写真の内容が反映されたルールを設定することとした。また、すごろくの掲載写真は紙面に詳細な説明を掲載することが難しいので、その写真についてクイズ形式で楽しむことができるよう、「大潟村歴史すごろく クイズ」冊子をつくり、すごろくとセットで配布することとした。

(2) 「大潟村歴史すごろく」の創作

「歴史すごろく」の創作は、大潟中学校において中学 3 年生の選択社会の授業（平成 19 年 7～10 月実施、のべ 11 時間）で行われた。実施前の 6 月に中学校の社会科担当教師と打ち合わせを行い、授業の内容を①オリエンテーションの実施、②村の歴史を学習支援者（案内ボランティア）から学び、すごろくのマス目にふさわしい写真を選択する、③写真を順序立ててマス目として整え、写真の簡単な説明とすごろくのルールを考える、④すごろくに掲載した写真について、三択式のクイズを考える、⑤完成したすごろくの前案を発表する、こととした。選択社会の授業計画及び学習支援者の役割分担を表 1 に示す。

選択社会の受講生は 3 年生 37 名中 27 名であった。村の歴史上のさまざまな分野の事項をすごろくに掲載するため、すごろくの表を「歴史」、裏を「生活」のテーマとし、「歴史」「生活」の 2 グループに分かれて創作することとした。グループの人数は「歴史」「生活」それぞれ 15、12 名であった。「歴史」グループは八郎潟の干拓前から現在に至るまで、干拓工事や農地整備、村の社会基盤整備等を中心に村の歴史の主要事項を学び、すごろくを創作することとし、「生活」グループは大潟村への入植から現在に至るまで、入植訓練や営農、生活の移

り変わりなど、村民の生活に視点をおいて歴史を学び、すごろくを創作することとした。

表 1 選択社会の授業計画と学習支援者の役割分担

回数	月日	授業計画	学習支援者と役割分担
1	7/12	【オリエンテーション】 すごろくづくりの趣旨と授業進行の説明。 案内ボランティア・コーディネーター紹介。 「歴史」・「生活」グループ分け。	学芸員（趣旨と授業進行説明） 案内ボランティア（自己紹介） コーディネーター（自己紹介）
2	7/19	【歴史を学ぶ(1)】 八郎潟干拓の記録映画「新生の大地 第1部」を鑑賞。 感想発表と意見交換。	案内ボランティア （映像や写真等の教材を使って中学生に歴史指導） コーディネーター （中学生といっしょに授業に参加）
3	8/30	【歴史を学ぶ(2)】 博物館収蔵資料（写真）を教材とした歴史学習。	
4	9/6	【歴史を学ぶ(3)】 博物館収蔵資料（写真）を教材とした歴史学習。	
5	9/13	【歴史を学ぶ(4)】 博物館収蔵資料（写真）を教材とした歴史学習。	
6	9/20	【歴史を学ぶ(5)】 博物館収蔵資料（写真）を教材とした歴史学習。	
7	9/27	【すごろくをつくる(1)】 すごろくのマス目の候補写真の選定。	コーディネーター （中学生の意見の引き出し、合意形成と意志決定支援）
8	10/4	【すごろくをつくる(2)】 すごろくのマス目の候補写真の配置検討。	
9	10/11	【すごろくをつくる(3)】 すごろくのマス目の候補写真の配置検討。マス目の解説文とルールの検討。	
10	10/18	【すごろくをつくる(4)】 すごろくのマス目の候補写真の配置検討。マス目の解説文とルール、クイズの検討。	
11	10/25	【すごろく原案の発表】 すごろくで遊んだ後、感想発表。	案内ボランティア コーディネーター （すごろく遊び・感想発表）

学習支援者（地域住民）は案内ボランティア8名、すごろくづくりコーディネーター（以下コーディネーター）2名とした。案内ボランティアは入植世代（昭和42～49年に大潟村に入植、60～70歳代、男性4名、女性4名）であり、コーディネーターは入植2世代目（40歳代、2人とも女性）である。授業前には学芸員（論者）、案内ボランティア、コーディネーターを交えてその日の授業の目標や進め方、予想される問題点に対する対処等の打ち合わせを行った上で授業が行われた。授業は初回と最終回を除いてグループ別に行い、各グループに案内ボランティア4名、コーディネーター1名を配置した。

平成18年度に「大潟村歴史かるた」を開発・制作した際、中学生に歴史指導をした案内ボランティアは中学生の反応の弱さを述べていた⁶⁾。そこで生徒と学習支援者との距離を縮めるため、本年度はオリエンテーションにおいて、①村の歴史事項のクイズの実施、②案内ボランティアの自己紹介の際、一部の生徒の祖父母の話題提供、の工夫を試みた。

第2～6回の授業では案内ボランティアが歴史指導を行った。第2回の授業においては、最初に八郎潟干拓の記録映画「新生の大地 第1部」をいっしょに鑑賞し、八郎潟干拓工事と入植に至るまでの流れを映像で確認した上で、中学生に感想を発表してもらった。第3回～6回は博物館が学習資料として提供した写真を用い、案内ボランティアによる解説が行われた（図1）。その際、授業中に案内ボランティアは生徒に問いかけをして意見や感想をできるだけ引き出し、それを受け止めて授業を進めることを事前に申し合わせた。また、コーディネーターは授業後半のすごろく創作において、生徒の合意形成や意思決定支援を行うため、生徒と一緒に案内ボランティアのお話を聞くとともに、生徒の反応や感想、視点に注目しても

らうように事前に申し合わせた。

すごろくの創作は後半4回（第7～10回）の授業で行われた。すごろくのマス目にふさわしい写真を選択し、それらを順序よく並べ、写真の簡単な説明とルールを設け、クイズの質問を考える作業であるが、グループごとにコーディネーターが生徒の意見の集約と意志決定支援を行った（図2）。第10回の授業で原案が完成し、最終回の授業には案内ボランティアを招いてすごろく原案の発表会が行われ、中学生・案内ボランティア・コーディネーターがいっしょにすごろく遊びを行った。

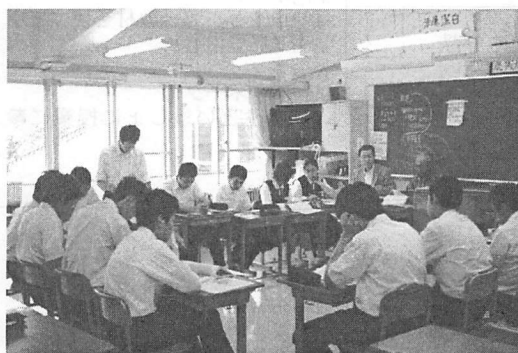


図1 案内ボランティアによる歴史指導

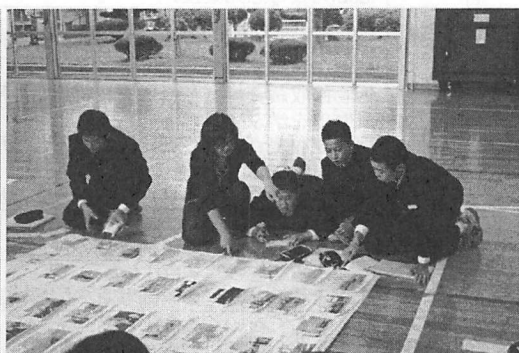


図2 コーディネーター（中央）による創作支援



図3 すごろくで取り上げられた写真「石灰散布」
（大潟村干拓博物館蔵）



図4 完成したすごろく

創作したすごろくは、表面が「歴史編」、裏面が「生活編」とされ、それぞれ写真が40枚、計80枚使われ、中学生らしい視点でまとめられている。例えば歴史編の18マス目には八郎潟干拓工事中の石灰散布の写真が取り上げられている（図3）。八郎潟干拓後の湖底に石灰をまいて土壌を中和する作業は、農地を造成するうえできわめて重要な作業であった。中学生はその事項を案内ボランティアから学び、すごろくの説明文を「運動会で使われる白いラインと同じものをまき、土を改良します。」と、小さな子どもたちでも分かりやすい文章にまとめた。さらに「石灰散布終了！これで稲作ができる！2コマ進む。」と、土地改良を終えたこ

との喜びと以後の稲作への希望をルールに表現していた。このような工夫や中学生らしい視点が随所にみられるすごろくとなった。

すごろくの前案をもとに印刷発注を行った。完成品を図4に示す。完成品は大湊中学生が手分けをし、平成19年12月25日に中学校広報とともに村内全世帯に配布した。

3. アンケートの実施

すごろくの前案発表後に学習支援者（案内ボランティア8名、コーディネーター2名）へ、すごろく完成・配布後に中学校の先生（校長、教頭、社会科担当教諭の計3名）および選択社会受講生27名へアンケートを実施した。アンケートの主な質問項目と回答の状況は以下の通りである⁷⁾。

(1) 学習支援者へのアンケート

①村の歴史について話した授業中、中学生と接して感じたこと。

(①前半中学生といっしょに授業に参画し、後半はすごろく創作に取り組んだ授業中、中学生と接して感じたこと。)

②村内の様々な立場の方々が共通の目標に取り組んだことに対する感想。

③今後も村内の様々な立場の方々が連携した事業を続けるべきか（理由を含めて）。

④来年も中学生といっしょに何かを創作し、全世帯に配布するとしたら何がよいか。

⑤そのほかご意見やご感想。

上記の（ ）内はコーディネーターのみへの質問である。案内ボランティア8名中7名、コーディネーター2名中2名から回答を得た。

(2) 中学校の先生へのアンケート

①案内ボランティア、コーディネーター、中学校、博物館が連携・協力して取り組んだ。その準備や連絡調整、授業の進め方について良かった点、改善すべき点。

②授業で使った教材（博物館収蔵資料）について良かった点、改善すべき点。

③この取り組みを通して、生徒が自分の「ふるさと」をふりかえるきっかけになったと考えるか。

④子どもたちが自分の「ふるさと」の歴史を理解していくための、地域社会における工夫。

⑤完成したすごろくについて、良かった点、改善すべき点。

校長、教頭、社会科担当教諭の3名に実施し、全員から回答を得た。

(3) 選択社会を受講した中学生へのアンケート

①授業の前半、案内ボランティアの方々からお話を聞いたときの感想。

②授業の後半、コーディネーターといっしょにすごろくの前案をつくったときの感想。

27名中26名から回答を得た。

4. 考察

(1) 中学生に対する学習支援のあり方

生徒へのアンケート結果によれば、授業の前半行われた村の歴史のふりかえりの中で、中学生は案内ボランティアの歴史指導に対して不満は見受けられなかった。質問①に対し、「知らなかったことや今まで気になっていたことが分かったので良かった。」「資料にないおもしろい話が聞けていい体験になりました。」「意外な事実があってびっくり！」等の回答が寄せ

られ、肯定的意見がほとんどであった。すなわち、生徒は自分なりに案内ボランティアのお話に興味をもち、村の歴史に関心を示し、授業に臨んでいたといえる。

一方、中学生に教える側である案内ボランティアは、その中学生の意欲を十分に感じ取れずにいた。アンケート質問①に対し、「最初は本当にびっくりしました。話していても反応がなく、どうすればよいのかとまどいました。」「説明の時に良く聞いているか、内容を理解しているか疑問に感じた。」など、回答した7名のうち5名が中学生と接したときの反応の弱さを指摘していた。また、中学生と一緒に授業に参画したコーディネーター2名も質問①に対する回答で、「静か、というよりおとなしい。恥ずかしいのだろうか。」「反応が薄く心配でした。」と述べ、案内ボランティアと同様に反応の弱さを指摘していた。

この反応の弱さは平成18年度の「大潟村歴史かるた」制作時⁶⁾と同様であった。前述したように授業ではオリエンテーションの工夫を試み、記録映画の鑑賞を実践したが、生徒と案内ボランティアの距離を思ったほど縮めることができず、授業の初期段階におけるコミュニケーションギャップを埋めることはできなかった。さらに案内ボランティアの中には質問①に対し、「私たちの授業の進め方が悪いのか悩んだ時もあった。」「子どもたちに歴史への関心や興味を抱かせるような方向に誘導できなかったこちらの未熟さ、工夫の足りなさを反省させられた。」と回答した人もおり、学習支援者がかなり不安を抱き、悩みながら授業に臨んでいたことが判明した。

授業中の生徒の反応の弱さや雰囲気の冷たさは、地域の学習支援者が授業を円滑に進める上でも、また今後の学習支援活動に対して多くの方々の理解と協力を得るためにも、克服すべき大きな障害である。解決するにはどうすればよいのだろうか。コーディネーターと先生方へのアンケートの結果から考察してみたい。

授業に参加したコーディネーターは、生徒の反応を引き出し、生徒の合意形成・意志決定を誘導し、主体性を育む役割を担っている。コーディネーターはアンケートの質問①に対し、「個々には出せない意見も、グループにするとお互いの意見をまとめ、すんなりでできた。」「友達どうしでは話し合ったり、助けてあげる場面もあった。」と述べており、中学生が授業中、さらに小グループになると、あるいは仲間どうしになると明確な意志決定や意思表示が行われていたことを観察していた。また先生方はアンケートの質問①に対し、「担当教員がもっと打ち合わせに入り、生徒の主体的な活動に導くためのかわりが必要だと思っている。生徒が、家族から聞いたり、自分で感じたりしたことを伝えあう時間がもっとあるといいと思う。」(校長)、「もっと担当教師の関わりがあっても良いかなと思う。夏休み期間中、生徒たちが調査するなどの『宿題』があればどうだったでしょうか。」(教頭)、「生徒一人一人に頼むことが多すぎたかな、と感じた。『生徒たちだけでの話し合いの時間』があれば、質問事項に対して生徒同士で共有でき、関心が高まったのではないか。」(社会科担当)との回答が寄せられ、教師の関わりのもとで、生徒の「調べる」「話し合う」「表現する」ことを求めている。

今回は12人および15人の2グループに分けて授業を実施した。この人数は、多くの中学校の1クラスの1/3～2/5程度の人数であるが、学習支援者が授業を行うにはその人数でも多いように思われる。教師と学習支援者が打ち合わせを十分に行った上で、5名前後の少人数グループに対して学習支援を行い、さらに生徒のみでの「調べる」「話し合う」時間を確保し、授業が実施できるのであれば、生徒の意思表示もよりスムーズになり、学習支援者とのコミ

コミュニケーションも図られ、授業が一層円滑にすすむものと考えられる。案内ボランティアの1人もアンケート質問②に対し少人数のメリットを指摘しており、少人数グループに対する学習支援は有効な手法であろう。また、コーディネーターは生徒の父母の年代であることから、生徒の様子を良く観察しており、授業中、案内ボランティアよりクラスの雰囲気や生徒の個性を把握しやすいと思われる。教師、コーディネーターを交え事前に打ち合わせを行い、コーディネーターが関わる形でグループワーク等の授業進行上の工夫を行うことができれば、その後の円滑かつ充実した授業進行に大きく寄与すると考えられる。また生徒にとっては、これらの授業支援の工夫は地域の歴史の理解を促し、歴史への興味関心の喚起につながるだけでなく、地域住民とのコミュニケーションを楽しみつつ学ぶ場にもなるであろう。

(2)学習支援における連携の意義

今回のすごろく創作では、学芸員（論者）がマネジメントを行い、案内ボランティア・コーディネーターと連携して学習支援を行った。ここでは、コーディネーターに注目し、学習支援における連携の意義について考察する。

第1～6回目の授業中、コーディネーターは案内ボランティアの説明や生徒の発言・感想をメモするだけでなく、生徒の態度や反応まで細かく観察していた。そして授業後半のすごろく創作の際には、案内ボランティアが説明した内容を引用して生徒に振り返らせたり、意図的に生徒をさらにグループ分けして意見の集約や発言を求めたり、いくつかの写真からふさわしい写真を検討してもらうなど、様々な場面で臨機応変に生徒の意志決定を促す工夫を取り、生徒と積極的に関わった。すごろく創作をふりかえてみて、コーディネーターはすごろく原案完成にきわめて大きく貢献した。2人のコーディネーターがいなかったら、すごろくは完成しなかったといっても過言ではない。事前の打ち合わせの際、論者はマネジメントを行う立場として、実際ここまで細かく指示は出していなかった。

案内ボランティア会員とコーディネーターは、互いに顔見知りではあるものの、日常生活や活動上における接点はほとんどない。しかし、「村の歴史を伝えるためのすごろくをつくる」という共通目標を十分に理解し、それぞれの立場で責務を果たしたことにより、「すごろく原案の完成と発表」という一定の成果を得ることができた。コーディネーターは授業前の事前打ち合わせに毎週参加し、また進め方や予想される事態についてお互いに意見を出し合い、そして授業にも加わっている。案内ボランティアはその過程を振り返り、アンケートの質問②に対し、「みんなが真剣に取り組んで、みんな仲良くなれたこと、やればできると感じました。」「共通の目標に向かって、それぞれの立場でお話ができ、一つのものをつくりあげることが良い経験。」「村民の様々な人が協力して目に見えなかったものが形になって現れ、大きな収穫でした。」などと回答した。すなわち、連携して授業をすすめていくにつれ、ボランティアとコーディネーターの間に信頼関係が構築されていったといえる。一方でコーディネーターの1人はアンケートの質問⑤において、「ボランティアの方々がこの大湊村の歴史をずっと伝え続けなければならないという使命感に溢れていた。」と述べており、案内ボランティアの熱意をくみ取り、主体性を発揮していた。そして一連の取り組みを振り返り、質問③に対しては「年代に関係なくやろうという、一体感・達成感があった。」「村内のもっている知識はどんどん活用すべき。」と回答し、連携の効果を認識していた。

一方で生徒もコーディネーターの熱意を感じていた。アンケート質問②に対し、「生徒だけではまとまらなかったり、わからないことを教えてもらいなからやるととても良かった。大

人だからこそできる提案もしてくれた。」「いろんなアイデアをもらったりアドバイスをしてもらったりして、充実した時間だったと思います。おかげで楽しくつくることができました。」などと、コーディネーターの支援を肯定的に、好意的に受けとめる意見が多数寄せられた。そして校長はアンケート質問①に対し、「すごろくのルールや遊び方に生徒の考えを引き出してくださっているのもとてもうれしかった。」と回答している。

「村の歴史を伝えるためのすごろくをつくる」という特定の目標に対して、異なる世代間の連携により事業を実施できたことは、博物館にとっても、地域社会にとってもきわめて大きい。ボランティアの一人はその意義を認識し、質問②に対して「年代、趣味、職業、考えの違う多様な人たちが域を超えて一つの目標に結集できたことは、新しい市民活動の方向性を示すものであろう。」とまで指摘している。実際、前述したように生徒とのコミュニケーション、生徒の合意形成や意志決定の引き出しなど、案内ボランティアやコーディネーターの負担は相当あったはずである。しかし、多様な組織や人材が連携しての事業の実施・継続について問うたアンケートの質問③に対しては、回収した全員が肯定的意見であり、「実際に事業に参加して大変だった。」「やめたかった。」という否定的な意見はなく、むしろ学習支援者が事業を連携して進めることの意義を感じとり、さらに事業への参画により充実感を得ることができたと解釈できる。また学習支援者のその熱意は、中学生も十分に感じ取ることができた。すなわち、学習支援における異なる世代間の連携は、学習支援者の主体性を育み創意工夫を促すとともに、生徒も含めた互いの信頼関係の構築につながったと考えられる。

実際には、連携による事業を行うにあたり事前の連絡調整、多様な人材がスムーズに動くための計画立案等のマネジメントに、論者は膨大な時間を費やしている。しかし、試行錯誤しながらも地域住民と事業のプロセス及び結果を共有できたことは、今後地域住民の主体的活動や学習活動を支援していくうえで非常に大きな財産となる。これらの過程を振り返り、参加した住民から率直な意見を聞き、改善点を把握し、今後のマネジメントに生かすことが、今後の事業の円滑な展開につながるだけでなく、博物館・学校・地域住民相互の信頼関係を一層強固にすると考えられる。世代交代が急速に進む大潟村にとって、世代を超えた地域住民による学社融合事業の実践は、今後の村における生涯学習事業の進展において大きな可能性をもたらすものといえるだろう。

(3)大潟村における学社融合の実践の意義

前述したように、中学生に歴史指導を行った案内ボランティアは、通常は博物館の来館者（小中学生も含む）への案内活動が中心である。主な活動の方向性は来館者であった。「歴史を伝える」というベクトル〔 $\vec{a}$ 〕は、主に村外からの来館者に対してのものであり、地域住民向けのベクトル〔 $\vec{b}$ 〕は小さいものであった。それがここ2年、学社融合による「かるた」「すごろく」づくりに関わることにより、地域住民に対してのベクトル〔 $\vec{b}$ 〕が大きくなったと考えられる（図5）。さらに案内ボランティアは地域住民へ歴史を伝えることの意義と重要性、そして中学生や地域住民、博物館との連携・協働の効果を認識し、その活動意欲は衰えてはいない。案内ボランティアの1人はアンケートの質問④に対し、「祖父母からの聞き取り調査を行い、村の歴史上の様々な話題について文集の作成が実現できたら大変すばらしいものになる。」と述べている。すなわち、地域住民のために、新たな生涯学習活動の機会拡大をめざしているのである。

案内ボランティアのこの意識変化は言い換えれば、いわゆる施設の「ボランティア」から、

自発的に地域的・社会的課題に取り組む「市民活動団体」へと脱皮しつつある過程であり、これは案内ボランティアのエンパワーメントプロセスそのものである。図示すれば $\vec{a}$ と $\vec{b}$ の和に相当する(図5)。「かるた、すごろくをつくった実績で、今後もいろいろな創作をしていけば、もっと村民の中に関心を持って〔案内ボランティアに〕入会する人が増えるのではないかと思います」とアンケートの質問④で回答した案内ボランティアもあり、学社融合事業を契機として、一層の組織の強化と一層の活動の充実を期待しているのである。

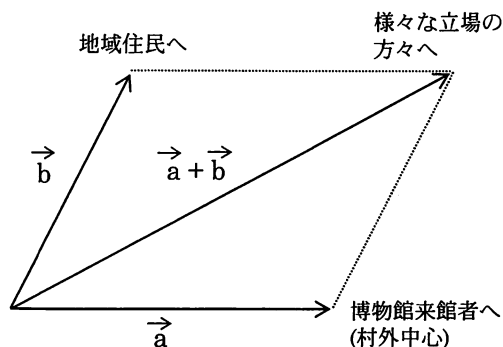


図5 大潟村案内ボランティアのエンパワーメントプロセスの概念図。矢印の長さは活動の大きさ、矢印の方向は活動の方向性を示す。

また、地域的課題である「大潟村の歴史を後世に伝える」工夫についても、アンケート結果から示唆を得ることができた。社会科教諭はアンケートの質問⑤に対し、以下のように回答している。

例えば授業の中で生徒から「湖だったから神社などなかったのに、今の神社はどうやってつくったのか?」という質問が出ました。神社＝古くからその地に伝わる建物、という概念を中学生になればもっているでしょう。だから今まで、村の神社の存在に疑問をもっていたのでしょうか。しかし、この授業で案内ボランティアの方から「(大潟神社の材料が) 由緒ある三重の伊勢神宮のもの」と聞き驚いていました。こういった生活の中のものを一つ一つ検証することができたことは良かったと思います。また、逆にこんなこともありました。案内ボランティアが「干拓のため近隣の山が一つなくなった」ことを教えました。ボランティアの方はきっと「それほどの大事業だった」ということを伝えたかったのですが、生徒からは「それは環境破壊ではないのか」という新しい世代の目からみた意見も出ていました。

上記の回答は、入植者世代と中学生との間で、大潟村の歴史に対する視点が大きく異なっていること如実に示している。入植者は全てゼロから作りあげた過程を知っている。一方中学生は全て既に存在していることが当たり前との認識である。これらの視点の違いを対比させたり、あるいはそれぞれの視点を何らかの手法をもって浮き彫りにして提示・紹介できるのであれば、それは地域の歴史に地域住民自らが多様な視点や解釈を与えるとともに、地域住民に歴史をふりかえる大きなきっかけを与えてくれると考えられる。すなわち、その地域の歴史の魅力創出の大きな可能性をもたらしてくれるものである。村の歴史について、入植者世代、後継者世代、そして児童・生徒それぞれの立場の疑問を解決し、それぞれの視点や解釈を生かし、それらを地域住民が共有できるようになれば、地域の歴史の魅力は大きく増す。この一連の過程は地域的課題に対する解決手法そのものにほかならない。そのためにも、多様な学習支援者が関わる形での学社融合の実践は有効であろう。

5. おわりに

地方の博物館を取り巻く財政状況はきわめて厳しい。その地域ならではの資料・情報が集

積しているにもかかわらず、財政面と人材面から、その使命を十分に果たすことができない博物館も多い。博物館の使命を果たし、博物館に集積する文化資源を地域のために有効活用し、そして地域の文化を創造する先導役となるためにも、ボランティアをはじめとする地域住民の参画、協力、協働は必要であり、併せて地域住民への積極的なアウトリーチ的手法により、博物館と地域住民との新たな関係を築いていくことが必要である。その手段のひとつとして、博物館と地域住民が地域の課題を共有し学習活動を創出する学社融合を実践することは、その実践過程に試行錯誤すべき点があり、かつマネジメントに相当の時間が費やされるものの、①地域住民に地域の文化資源を再認識してもらえる、②多くの方々に連携・協働の「力」を理解してもらうことができる、③地域住民の主体的活動を促し、地域的課題の解決手法に示唆を与えてくれる、有効な取り組みであったといえる。これらのことはまた、博物館と地域社会との信頼関係を向上させ、地域社会における博物館の地位の向上に大きく貢献するものである。

〔付記〕本稿は日本生涯教育学会第28回大会における発表を加筆修正したものである。

引用・参考文献及び注記

- 1) 山本恒夫・浅井経子・坂井知志編『『総合的な学習の時間』のための学社連携・融合ハンドブック』文憲堂、2002、pp.9-12
- 2) 八郎潟干拓事業は、戦後の食料不足の解決と八郎潟湖岸地域の水害防止、大規模機械化農業を実践するモデル農村の建設をめざし、昭和32～52年に行われた日本最大の干拓事業である。湖の中央部の干拓地15666haが昭和39年に大潟村として発足した。国により昭和42年から49年までのべ5回の入植事業が行われ、全国から580世帯が入植し、営農を行っている。主要な産業は稲作を中心とする農業である。平成20年4月1日現在の人口は954世帯、3280人であり、幼稚園・小学校・中学校は各1校である。
- 3) 案内ボランティアは八郎潟干拓事業と大潟村の歴史についてテーマを設け「大潟村案内ボランティア公開講座」を年2回ほど実施しているが、入植者世代が多く参加し、参加する年齢層に偏りがある。また開催時期・テーマによっては参加者数が少ないこともある。
- 4) 文化庁芸術拠点形成事業は、美術館・博物館等の自主企画による他の館のモデルとなるような事業に対して文化庁により重点支援が行われ、文化芸術拠点の形成を図ることを目的とする事業。
- 5) 薄井伯征「大潟村干拓博物館所蔵の八郎潟干拓事業に係わる新聞記事のデータベース化」(『IM』、No.11、2006、pp.10-15)
- 6) 薄井伯征「学社融合による地域の歴史を後世に伝える教育教材の開発と生涯学習支援上の課題 -『大潟村歴史かるた』づくりを通して-」(『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』、No.29、2007、pp.113-129)
- 7) 紙面の都合上、アンケートの質問は要約してある。また、本稿でアンケート回答の引用は、その質問に対する回答の抜粋であり、引用文中の〔 〕は論者が補ったものである。